

---

# 羊料理の素材

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

羊料理の素材

### 【Nコード】

N1942E

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

オーストラリアの老夫婦。もう犬だけが可愛い存在だがその犬を連れてチャイニーズレストランへ行く。ところが犬がいなくなり中国人が犬を食べると知っていて大騒ぎに。文化はそれぞれです。偏見はいけません。

## 第一章

### 羊料理の食材

中国人は犬も食べる。それこそ四本足のものは机か椅子以外は全部食べるのだから犬を食べるのも当然と言えば当然の話だ。

しかしこれを批判する者がいる。文化が違うのだから批判するのはお門違いだがそれでもだ。それはチャイニーズレストランに対する誤解にもなっていた。

オーストラリアメルボルン。ここでそのことを深く誤解する一人の老婆がいた。

「信じられないわ」

ジェーンはこう言ってそのことを聞く度に顔を顰めさせる。

「日本人が鯨を食べるのも信じられないけれど」

「おいおい、またその話か」

夫のデカログは妻が太った白い顔をことさらに顰めさせるのを見る度に笑って言うのだった。

「だから。そんなに食べるわけじゃないらしいぞ」

「けれど食べるのよね」

それでも言うジェーンだった。

「アメリカ人も蛙なんて食べるし。呆れるわ」

「蛙も駄目なのか」

「鯨も犬も蛙も駄目よ」

むきになっていつもこう主張するのだった。

「あんな可愛いものを食べるなんて」

「そういうものか」

「そうよ」

デカログに対して述べる。

「絶対駄目。特に犬はね」

「まあ犬を食べるのは俺も駄目だな」

デカログもそれに頷いて足元を見る。見ればそこには黒いダックスフントがいる。そのダックスフントは二人の足元ですやすやと眠っている。

「ビリーを食べるなんてとてもな」

「ええ。ビリーは私達の最後の孫よ」

「ジエーンもビリーをいとおしげに見下ろして言うのだった。」

「孫を食べる人間はいないわよ」

「そうだよな。ところで」

「何？」

「今度チャイニーズレストランに行かないか？」

「犬を食べに？」

「まさか」

肩をすくめてそれに言葉を返す。

「豚肉だよ。何なら牛か羊でもいいさ」

「そう。それならいいけれど」

それを聞いてまずはほっとするジエーンだった。

「豚肉ならいいわ」

「魚も美味いらしいぞ」

「魚もいいのよ」

機嫌をなおしたような顔でデカログに答える。

「お魚は身体にもいいしね」

「日本人がよく言っているな」

「日本人も魚や羊を食べていけばいいのよ」

いささか手前勝手なことを言い出した。だが彼女に悪気はない。

あくまで本人からしてみれば善意で言っているのである。

「お魚は大好きなんだし後は羊」

「羊か」

「日本人は羊を食べないそうね」

いぶかしむ顔で夫に問うた。

「ああ、そうらしいな」

「わからないわ。羊は美味しくてカロリーも少なくて」

オーストラリアでは羊料理がかなり有名である。牛肉も食べるのだが羊もかなり食べているのである。オーストラリアやニュージーランドでは羊は親しみのある存在なのだ。

「鯨なんかよりずっといいのに」

「確かに羊はいいな」

デカログもそれに頷く。彼も羊は好きなのだ。

「じゃあ羊料理にするか」

「中国の羊料理ね」

「ああ。これが中々いけるらしいんだよ」

こう妻に話す。実は彼自身が行きたくてたまらず妻をその気にさせようとしているのである。しかし妻にはそれは出してはいない。

「どうだい？」

「そうね、行きましょう」

ジェーンもそれに乗った。

「そういうことでね」

「よし。じゃあ明日行くか」

「ベリーも一緒よ」

ここでまた足元のベリーをいとおしげに見るのだった。本当に大事にしているのがわかる。

「いつも通りね」

「ああ、それは絶対だ」

デカログも一も二もなく妻の言葉に頷いた。

「ベリーを置いて何処にでも行けるものか」

「そうよね。もう子供も孫も皆家を出たし」

ここではジェーンは寂しげな顔になった。今家にいるのはこの夫婦だけなのだ。それを思うとやはり寂しくその分だけベリーがいとおいしいのである。

「ベリーしかないものね」

「そういうことだ。じゃあ明日な」

「ええ」

こうしてそのチャイニーズレストランにビリーと共に行くことになった。その当日。レストランは本格的な中華風であり異国情緒を二人に見せていた。赤っぽい木の柱も金色の装飾も二人の目を楽しませる。とりわけ看板でもそうだが黒や金色に書かれた感じが彼等をして中国に來たような気にさせて心を楽しませていた。

「中々いい内装ね」

「ああ、それで評判もいいらしい」

店の中を赤いチャイナドレスのウェイトレスに案内されながら進む。その中で妻に対して述べた。

「本格的だつてことだね」

「味は？」

「味も折り紙つきらしいね」

にこりと笑つて妻に述べる。

「一度食べたら病みつきになるらしい」

「そんなになの」

「ああ。とにかく美味らしい」

「そう。じゃあ期待させてもらうわ」

見れば案内しているウェイトレスは金髪で彫のある顔でそれを見ただけで彼女がオーストラリア人であることがわかる。しかしそれは今はどうでもよく先に進むのだった。ところがここでそのウェイトレスが振り向いて二人に告げるのだった。

## 第二章

「こちらです」

右手をその手で指し示していた。

「こちら？」

「そうです。犬はこちらで預かっておりますので」

「あっ、そうね」

ジエーンは言われてそのことに気付いた。流石にテーブルにまで連れて行つては他の客の迷惑になる。そのことに気付いたのだった。

「それはね」

「はい。ですから暫く預かせて頂きます」

オーストラリア訛りの英語でこう話すのだった。残念ながらこればかりはどうしようもなかった。やはりオーストラリアにいたことを実感させる。

「それで宜しいですね」

「ええ」

ジエーンは少し寂しげに自分の腕の中に抱いているビリーを見てから答える。見ればビリーは彼女の手の中でその黒い目を奇麗に輝かせてへっへっ、と舌を出している。その動作がいかにも犬らしかった。

「御願います」

「わかりました。それでは」

こうしてジエーンを預けてからテーブルに案内された。テーブルもまた中華風で中央に丸い回転する台があった。そこに次々と食べ物や物が置かれるということはもう二人も知っていた。

「それで何を頼むの？」

「だからあれだろう？」

デカログは丸いテーブルの向かい側に座る妻に対して答えた。天井も絨毯もそうであるせいとその場全体が赤く彼等の気持ちもその

赤の中にあつた。

「羊料理だよ」

「羊料理ね」

「ここは北京料理の店だからな」

「北京料理だと羊なの」

「知らなかったのか？」

今の妻の言葉には怪訝な顔になる。

「北京といえば羊だろうに」

「そうなの」

「知らないのか。まあいい」

それなら仕方ないとすることにした。割り切ったのだ。

「それでだな」

「羊料理を頼んでくれるのよね」

これを夫に対して問うのだった。

「やっぱり」

「それはもうな」

決めていた。言うまでもないことだった。

「決めている。さて」

ベルを鳴らすと先程の金色の髪に赤いチャイナドレスの美女がやって来た。彼女はにこやかに笑って何でしょうかと尋ねてきた。

「注文が決まったよ」

「はい、それでは」

早速注文を受ける体勢を整えてペンを右手に持つのだった。

「どうぞ」

「串羊肉と」

「はい」

まずはそれであった。

「後羊のしゃぶしゃぶをもらおうか」

「その二つですね」

「あと主食だが」

「餅ですか？」

小麦粉を練って焼いたものだ。中国、とりわけ北京を含めた北方ではよく食べられるものだ。

「そうだな。それと麵。あとは水餃子を」

「わかりました」

「デザートは軽くな」

かなり食べるが見れば二人はかなり体格がある。だから老人とはいえ食べるものもかなりのものなのだ。

「胡麻団子でも」

「ではそれで宜しいですね」

「あとお茶もね」

「ええ」

全てのメニューを頼み終えた。まずは麵類と水餃子が来たがその二つはすぐに食べてしまった。それから来たのが餅とメインである羊料理であった。

「これが中国の羊料理ね」

「ああ」

テーブルの上に置かれた羊料理を前にして声を出す妻に対して答えた。

「これがそうだよ」

「こちらは何かオーストラリアでもよく見る感じね」

ジェーンは串に刺された羊肉を手に取りながら言った。

「見たところ」

「普通に焼いた感じだな」

「そうね。慣れていいるから食べ易そう」

あくまで彼等のいつも食べている料理の中で話すのだった。

「ただ。こっちは」

「しゃぶしゃぶか？」

「ええ。とても変わってるわね」

しゃぶしゃぶを見て目を丸くさせていた。沸騰した湯で満たされ

ている鍋を見て驚いているのではなくその横にある非常に薄く切られた肉を見て驚いているのだ。ジェーンにとってははじめて見る肉の切り方であった。

「これを。どうやって食べるのかしら」

「ああ、それなら簡単だよ」

箸を使ってその肉のうちの一片を鍋の中に入れながら話をする。

実は彼は箸が使えるのだ。ジェーンはそれができないので実はフォークで食べていたのだ。

### 第三章

「こうやって湯に少し入れて」

「少しね」

「それからこうやって食べるんだ」

大蒜を入れた胡麻だれにつけてから食べる。口に入れたその瞬間に笑顔を妻に見せるのだった。

「うん、美味い」

「美味しいのね」

「ああ、これはいいよ」

そう言いながら肉をまた鍋の中に入れてすぐに妻の皿に入れる。

ジェーンはそれをフォークで刺してから口に入れる。するとすぐに彼女の顔も綻ぶのだった。

「これって」

「美味いだろ」

「ええ、とても美味しいわ」

にこにこしながら夫に答える。

「こんな羊の食べ方もあるのね」

「ああ、俺も話には聞いていたがな」

実際には食べたことがないのであった。

「これはかなり」

「いけるわね」

「最初の麺や水餃子もよかったがな」

「あれは結構食べてるじゃない」

そうしたものを出す店はオーストラリアにも結構多いのだ。オーストラリアにも華僑が大勢いるのだ。華僑がおらずチャイナタウンもない国は殆どない。

「まあ美味しかったのは本当だけれど」

「この串のもいいな」

「ええ、本当に」

「さあ、どんどん食べよう」

また妻の皿にしゃぶしゃぶの肉を入れる。

「時間はあるしな」

「ええ、わかったわ」

こうして二人は中国の羊料理を堪能した。デザートまで食べた後で店を後にしようとする。しかしここでビリーを呼ぼうとした時だった。

「えっ!？」

急にカウンターの店員に驚きの顔を見せられたのであった。

「犬、ですか」

「ええ、そうよ」

ジェーンはこの時は普通の顔でカウンターのウェイターに答えた。チャイナドレスのウェイトレスに対して彼は中華風の Cutter であるがごく普通のウェイターの格好をしているのは女の子の格好はあえてお客を呼ぶ為のものであるということであろうか。

「黒いダックスフントの」

「ダックスフントの」

彼はさらに難しい顔になる。見れば彼は黒い髪と目で彫のない顔のアジア系の若者であった。

「暫しお待ち下さい」

「わかったわ」

この時まではジェーンは普通にしていた。しかしであった。ここで自分の後ろを通るウェイトレス達の仕事の話を耳にしてそれが一変するのであった。

「五番のお客様に」

「犬が」

「犬!？」

犬と聞いてすぐにビリーを連想したのであった。

「いい食材が入ったからね」

「犬は何処なの？」

「食材……犬……」

頭の中でつながった。そこには昨日デカログと話した中国人が犬を食べるといふ話が接着剤となったのであった。それで頭の中で考える。彼女が至った答えは彼女にとっても周囲にとっても最悪のものであった。

「ビリー、ビリーが！」

「どうした！？どうしたんだ！」

「食べてしまったのよ！」

泣き叫びながらこう言うのだった。

「食べてしまったって！？」

「ええ、そうよ、そうなのよ」

両手で顔を覆いながら泣いて話をする。

「私達がビリーを」

「ビリーを！？まさか」

「だってここチャイニーズレストランよね」

「あ、ああ」

それは間違いない。料理を食べたからそれが何よりの証拠になる。

「だからなのよ」

「だからって。何を」

「そうよ、ビリーを預けたじゃない」

泣き喚きながら夫に言う。

「それでなのよ。ビリーは」

「ビリーがどうしたんだ」

「中国よ」

話が混乱していたが必死に夫に言っていた。

「犬、食べるじゃない」

「犬だって！？まさか」

「そうよ、それなのよ」

ここにきてようやく彼は事情を察した。中華料理で犬といえばで

あつた。

「それで私達が食べたのはビリーだったのよ」

「何てことだ……」

「どうしましょう、シカログ」

また夫に泣き叫ぶ。

「私達、ビリーを」

「あの、お客様」

泣き叫ぶジェーンと呆然とするデカログに対してウェイターが啞然とした顔で声をかけるのだった。

「さつきから一体何を」

「ビリーを返して！」

「ビリーをですか」

「そうよ、犬よ」

彼にも泣き叫びながら言うのだった。

「私達の犬。黒いダックスフントを」

「ダックスフントを」

「まさかと思うが調理はしていないな」

デカログも取り乱しながらそのウェイターに問うのだった。

「それでわし等にその料理を出して」

「お話がよくわからないのですが」

二人が、特にジェーンがあまりにも取り乱しているのので何を言っているのかわかりかねてこう問うのだった。

「犬がどうか。何があつたのでしょうか」

「私達の犬を調理して出したじゃない！」

「違うのか!？」

「犬を、ですか」

ここで彼はようやくわかってきたのだった。

「お客様方のお連れした犬を調理してお客様方にお出ししたと」

「違うの!？」

「そうじゃないのか!？」

「まさか」

困惑したままだった。だがそれははっきりと否定したのだった。

「我が店では犬料理は扱っておりませんが」

「けれど」

「いえ、それは保障致します」

それでも彼は言う。

「間違ってもそれはございません」

「けれどビリーは」

「ダックスフントですね」

またそれをジェーンに対して問う。

## 第四章

「え、ええ」

ジェーンもまたそれに頷く。相変わらず取り乱してはいるが。

「わかりました。確か色は黒でございますね」

「そうよ」

その問いにも答える。

「黒いダックスフントなのよ。あの金髪のウエイトレスさんに紹介されて」

「金髪の、ですか」

「言葉の訛りはこのので」

それも告げるのだった。ウエイターはそこまで聞いて完全に納得した顔で頷くのがだった。

「わかりました。それでは」

「ビリーは。いるので」

「御安心下さい」

落ち着き払った態度と表情で二人、とりわけジェーンに対して述べる。取り乱しきった彼女に対して彼の様子が実に対象的であった。

「それでしたらすぐに」

「そうなの。すぐに」

「暫くお待ち下さい」

彼はジェーンにこう告げると一旦その場を後にした。そしてすぐに一匹の黒いダックスフントを抱いて出て来た。そのダックスフントは鼻をフンフンと鳴らして彼の顔に鼻を近付けていた。

「あつ、ビリー！」

「この犬で間違いありませんか」

「ええ、ええ」

落ち着きを取り戻し、安心しきった顔で彼に答えるのだった。

「そうよ。この犬がビリーなのよ」

「丁度今預かっているダックスフントは一匹なのですぐにわかりました」

彼はこう述べてそのビリーを二人の前に下ろした。ビリーはすぐにジェーンにまとまりつきへっへっ、と息を出して歩き回るのであった。ジェーンもデカログもそんなビリーを見てほっとした顔になっていた。

そしてまずは、デカログがウェイターに謝罪した。

「申し訳ありません」

「本当に」

ジェーンもそれに続く。

「犬がないからつい」

「何と言えればいいか」

「実はよくあることでした」

しかしウェイターは相変わらず平然とした調子でこう言葉を返すのだった。さつきは多少困惑した顔を見せていたがもうそれは消えてしまっていた。

「よくあることですか」

「そうですね。中国では犬を食べますね」

「ええ」

それが原因で騒いだのだから頷くしかできなかった。

「それでだったの。御免なさい」

「ですが。我々もそうそう犬を食べるばかりではないのです」

「そうなの」

「では一つ御聞きします」

ここでウェイターはジェーンに対して穏やかな声で問うのだった。

「羊とカンガルーの肉があります」

「ええ」

オーストラリアではカンガルーも食べることがある。鰐を食べる者もいる。実際のところオーストラリアも多民族国家でありしかも原住民であるアボリジニーもいる。食生活はわりかしバラエティに

富んでいたりもするのだ。

「両方があった場合どちらを召し上がられますか？」

「それは勿論」

ジェーンにしるデカログにしる答えは決まっていた。

「羊に決まってるわ」

「やっぱりそれが一番だろう」

「それと同じことです」

ウェイターは静かにこう述べた。

「我々にとって犬はそうした存在なのです」

「肉としてはですね」

「そうです」

今度はデカログに答えた。

「やはり我々もどちらかというと豚や羊や犬の方を食べます」

「犬をメインにしているわけじゃないのね」

「その通りです。最近ではとりわけ食べることがなくなりました」  
元々犬を食べるのは他にこれといった動物性蛋白質がない貧しい者が多かったからだ。その結果として食用の犬も生まれたのであるが。それでもやはり中国においても食べる肉のメインは犬ではないのだ。

「やはり豚や羊が」

「御免なさい、そんなことも知らずに」

「わかればいいのですよ。ただ」

「ただ？」

「一つ憶えておいて欲しいことがあります」

ここでウェイターは急に真面目な顔になるのだった。

「私達が食べることもまた文化です」

「文化ですか」

「それを野蛮だと思ってはいませんか」

それを問うのだった。

「犬を食べることが」

「それは」

「それは間違いであることも申し上げておきます。そして」  
「そして」

「その間違いをもとに野蛮な行いに走るのだと考えられるならばそれは残念なことであることも申し上げておきます」

彼の言葉は二人の、特にジェーンの心に深く突き刺さるのだった。彼女はビリーを抱いたまま項垂れる。頭を強く撃たれたようにその場で項垂れるのだった。

羊料理の食材 完

2008・4・8

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1942e/>

---

羊料理の素材

2009年3月24日09時34分発行